平成２５年度研究成果報告書《平成 25 年度教育課程研究指定校事業》

都道府県・指定都市番号	４６	都道府県・指定都市名	鹿児島県
ふりがな **学校名**（生徒数）	みなみ　しりつきんぽうちゅうがっこう 南さつま市立金峰中学校（１５５人）		

（本研究に係る問い合わせ先）
所在地：鹿児島県南さつま市金峰町中津野５００番地１
電話番号：（０９９３）７７－００１５
研究内容等を掲載しているウェブサイト URL : http://www.minamisatuma.ed.jp/jh/kinpoucyu/

【研究成果のポイント】

○研究課題番号：３中学校
○研究対象教科等：外国語
○研究のキーワード：段階的な書くことの指導，まとまりのある文章，相互修正活動
○研究成果のポイント：

本研究では，段階的に書く量を増やしていくことで，英文を書くことを得意としない生徒の苦手意識を和らげ，また段階的な書くことの活動を通して，接続詞や文の構成の仕方等を学習させ，まとまりのある文章を書く学習指導の工夫の仕方を提案する。

【研究の目的，研究内容】

（１）研究主題

伝え合う自己表現力を高める学習指導の工夫
～段階的な「書くこと」の指導を通して～

（２）研究主題設定の理由

平成 25 年１月に実施した平成 24 年度鹿児島県「基礎・基本」定着度調査によると，英語に関して，「書くこと」の通過率は１年生が 73.3%（県 78.8%），２年生が 53.0%（県 57.8%）と低い結果が出た。また，２年生の１年次における「書くこと」の通過率は 82.3%であり，２年次での「書くこと」の力が１年次と比較して大きく下回っている。このことから，２年次で既習の言語材料を用いて，まとまりのある文章で表現する言語活動の工夫を行う必要がある。

そこで，本校では，英語への興味・関心を高め，積極的に表現活動を行うことに繋がるように，書く活動を効果的に取り入れていくことにした。書く活動は，表現したい内容を修正することができ，それを生徒に確認させることで曖昧な表現を正確なものとして定着させる指導として工夫することができると考え，段階を踏んで書く力を向上させる取組として本研究主題を設定した。

（３）研究体制

本研究は，毎週教科部会の時間を設定し，細部の打合せ，確認を行いながら研究を進めた。校内においては，管理職は県教育委員会，南薩教育事務所，南さつま市教育委員会との連携を図り，校内研究担当者及び教務主任が年間を通して校内研究を計画的に位置付けて支援体制を整えた。また，英語科以外の教員は校内の研究授業等に参加し，指導案検討や授業研究等を行った。さらに，南さつま市教育委員会が主催し，外部から大学教授を招聘した市英語教育研究会を実施し指導を受けた。最後に，平成 25 年 11 月 29 日，本校において，本研究に係る授業公開を開催し，研究成果の還元を図った。

（４）１年間の主な取組の経過

平成25年度	○４月	生徒の実態把握，CAN-DO リストの作成開始
	○５月～７月	【第１段階】
	○７月４日	研究授業の実施（教科調査官の指導助言）
	○８月	英語教育研究会（鹿児島大学教育学部教授の指導助言）
	○９月～10 月	【第２段階】校内研究会（検討会）を実施
	○10 月 17 日	授業公開指導案第１次検討会（県教育委員会義務教育課の指導助言）
	○11 月～12 月	【第３段階】※１月以降も継続
	○11 月５日	授業公開指導案第２次検討会（県教育委員会義務教育課の指導助言）

	○11 月 29 日	授業公開
	○12 月	生徒の変容の実態把握及び分析
	○１月	研究のまとめ・協議会発表準備

（５）具体的な研究内容・方法，研究を進める上での工夫点等

ア　生徒の実態把握（アンケートによる意識調査，作文力の調査）

イ　各段階における書く活動の工夫（第２学年対象）

・【第１段階】基本的な文法や表現を用いて短文を書く。

・【第２段階】It is good. / I like dogs. / I feel happy. / I enjoy English classes. / I am happy. / I was sad. 等の例文を使って，もう一文追加する。

・【第３段階】３～４文程度のまとまりのある英文を書く。

ウ　生徒による相互修正活動

短文作成後に相互修正活動を行うことで，書くことを苦手とする生徒への支援や読み手に伝わるように書く意欲付けになる。また，豊かな内容に触れることで，英作文力の向上へと繋げることができる。

エ　ＪＴＥ同士のオールイングリッシュによるティーム・ティーチング

ＪＴＥ同士の対話を提示することによって言語の使用場面を理解させるとともに，生徒への学習指導上のそれぞれの役割を事前に決めることでスムーズな言語活動を行うことができるようにする。また，生徒の状況把握にも役立てる。

オ　ＩＣＴ活用（市教委による電子黒板の設置）

電子黒板の特性を生かし，授業の導入時に学習の流れの提示，語彙や基本表現のパターン・プラクティス，音声教材など，効果的な活用を図る。生徒は授業の教材やコミュニケーション活動に興味・関心をもちながら，言語活動に積極的に取り組むことができ，円滑にコミュニケーションを図ろうとする態度を育むことができる。

カ　CAN-DO リストの作成と活用

各単元の指導計画において，学習到達目標を明確にし，生徒に目標と学習意欲をもたせて英語学習に取り組ませる。

【研究成果とその意義等】

（１）研究成果　※生徒への意識調査結果から

「英文を書くとき，単語や文をつなぐ語を使うことを意識していますか」が 58.9%から 65.5%に増加し，「英文を書くとき，時制などを意識していますか」が 64.9%から 80.0%に増加し，「英文を書くときに，文と文のつながりを意識していますか」は４%程度の増加で変化はまだみられない。ただ，作文に関する調査項目では，代名詞を使うことができている英文が 20.7%，接続詞を使うことができている英文が 48.3%増加し，まとまりのある内容と判断できる英文が確実に増えてきた。

また，第２段階で自分の気持ちや物事を説明する表現を一文付け加える活動を経たことで，第３段階での３～４文程度の英文作成にスムーズに取り組むことができた。さらに，授業中の発話や定期試験への解答の際，Yes や No のみでなく，自分の思いや考えなどを補足して書いたり話したりすることが増えてきている。

（２）研究成果の意義等

書くことを苦手とする生徒に対して，段階的に書く量を増やしていく活動を行わせることは，書くことへの抵抗感を和らげ，書く意欲を向上させる手がかりとなる。また，書く段階を３年間で系統的に指導することに発展させることや，書く量から質へと転換するための取組が今後考えられる。さらに，相互修正活動は，互いの良さを学んだり，書くことへの自信を高めたりなど，書く意欲をさらに高める手立てとなる。

（３）指定期間終了後の取組

本研究の対象学年である２年生のみ CAN-DO リストを作成したが，本校の実態に応じて再度検討し，全学年の CAN-DO リストの作成を行い，生徒の自己評価としても活用を図る。また，小学校外国語活動との連続性を重視した年間指導計画を作成するとともに,中学校３年間を見通してまとまりのある文章を書く活動を継続して行い，表現や内容等の質が高まるような学習指導の工夫を図りたい。